

環海異聞

二二

二



k 44

富士山文庫



290.9

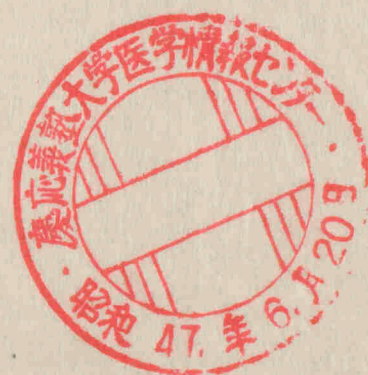
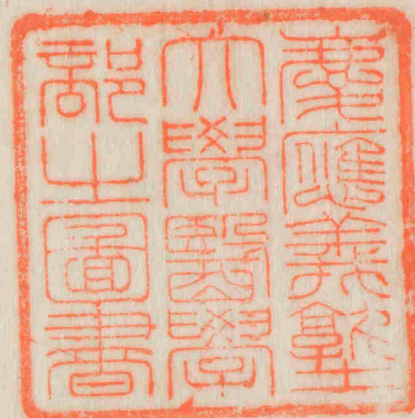
Ka

2

F²
カ-76

290.9
K

No. 2517
12 K 42



富士川文庫

165

附三又

漂客紀聞卷之二

ナ—ツカ滞留紀事之二

船名のあはエストラスイワノイチガラロフ
とナルガラロフは苗字なり彼国の人とて
苗字はあはエナルは手よひも苗字
と称しナル船も昇け人の船より始めは
ゆ場をへきし人もけガラロフよりきしゆ
け多あ國のよ入る後け多のきしゆ

海獣の皮製舟之の爲に船をきりて至役人も
碇をゆるすと云はれり

海人の酋長ともてり者もおえりそは
れ古家へ入りて見ゆる常の者けり穴より
いりて廣く板敷より天井ありとも張り
ありて本古の帝王より裾より紐履の
災後より金銀の玉をりりともを秘蔵
りし是を古物とせりとも云ふは
平人よりは雄豪代百代ありまはけり酋長も

三白ありてりり程の事なりけり
ては海人の子も仍るなりオロイ
おより年貢五匁の毒は改役ある人
代被せりてりり

夜中 焼油ハコトニキト云ふ子ハ海豹^{アサ}ホフ

只 獵虎^{ラツ}等の油を用ゆ焼油の用は麻^{アサ}襦^{ニユ}
するとの古きと云ふて用ひり

一 米ハ江戸時以来ありり所せり朝早く起き
穢^{アサ}なり

一 け急を風別々烈を節よ途中まで吹例さ
るるなり及て此れ掛者居るなり食る
る毎ひゆ場不きてハ僅のりよ此れゆゆも風
はる此れ良ふ此れ来此れゆゆとて年家の者
ハ幸々ぬるなり也此れ此れ

一 食物ハ鶏麩鶏等の類斗り目こ給へや

一 七日よきなりあきりコーシキの油を大
麦の敷を焼り炙りはけあきり湯を入れ水
代か煮てゆりたるものを振まひれや

一 商人ハ皮の類を多く取集め煮りゆ節斗り
襦袢等のやよちの食物を煮へや

一 湯よきゆ草のこし此れを焼きて灰よした
るを煮るこきすりも勢を湯人糞より海うこ

一 子供もゆきハ此れを鼻へこき入又遠く
の所へもゆき糖菓の氣ある肉ハ食へる
なり

一 け湯水ハ清冷なり

一 婦人産後より病ひあるを多う産後より
初生の児を漸の病る所へまればゆゑに治す
又小児を時々そふといふきつておをば
せしこゝろにけりあるより多う治して
赤子にもあさるゝの肉ありと志ありとせむ
とえり

一 小便を海へそく洗滌水は用ひは長の時
とて海へ小便を二三日とてそく洗ふは長
とて清く垢落しきれいなるなり改竄す
小便をそくあつたり

一 赤玉取は麻をとりけりたる物或は金おれ玉を
針を綿糸糸を縫ふお裁せたり有るなり
け所より一ツ早小極ハ頂とより少く水のきへ

一 白ひくそくヤル

一 け所の玉取ハ 日 アカタ 月 トナタ 水 タカ

けこつをそへゆこぬれ

アミエヤ一ツカも三葉ハ同根とありや

一
翌年乙卯春の末より船をイワノイテガ
ラロフヤ中ハ平日莫然たり終業又活け
名牙分りも置有る後ゆる二年充て
おより交代被りゆき連き渡りてや
よりおきの用をれとけせ指す人
革の足履をよへやゆ席をけはれも
正月三日とそへけおぬれ

島人男女並

少女之図

け人乃
熱名をアリ
ラートウ
と



小島
島人



一 右カラロフのハ皮靴を五集めを被る様

海に飛来りゆき帰る様

けりハ帰帆一糸

ゆきの事



田中様を呼ぶ事六十ヤは近くおえ居るゆき

おれ様を呼ぶ事

ゆきの事

縣上頭圍



けりカラロフの靴を地へ入連る様

額^{ヒタイノウヘカミシラノゲリ}上頭圍よもめ
冠^カり物の場

木を彫るに似
漢字はあるとい
用巾着をよめ
うり



一 右カラロフのハ皮靴を五集めを被る様
海に程集りゆきよ帰る様——ゆるゆるへた
け度ハ帰帆一年あ——五度ハ船を連渡り
ゆきの事と取りやゆ

一 カラロフ事六十やと近くおえりやゆ生れ
ハチライカといふ所の由書も連を渡り石
やゆ在ぬ中よ子そへお生の由書の事
そす七葉と取りやゆ

一 け度カラロフの船を地へ連るうりゆ

始末宜は度由右勅功より商人既の程
成者より中ずれ技持ち方も玉なり
なり是ハ玉中の商人中間より割合て
あすりのやうな形なり

四月廿七日即サレハ三ヨウと申す處へ至る所は
いふはヨロミヤ人五人余五互いあはれ
海玉はらつこあきりの皮を積入れしめ
船を寄せしめとて人々の船を陸に仕
一に月三日とて是中ハナカウカ船の後十日

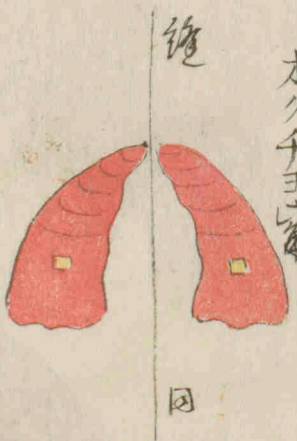
もかりをいぬ海水の氷はさくぬ
繋りかけられ船ともい海面は山の頂所
較し是より高き山ありとて是れは
海玉の氷りたるなり又是より氷雪
よりまうて山のこゝろはあつた船に
見ゆて船の中なる船は海玉の山
利加の角よりサレハ三ヨウとて三百里
の所は繋るなり是れは氷
海玉あり氷の山ありし所とて入りぬ

一 糸 一 かしらるるなりとて早く船
 とぬ 一 ありて急ぎてけりより二日程
 系度 一 サバヨウら若船すお帆より
 日教 古エヨウと強より

五月十日十二日以アミセイウカとヤる處へ急仕
 けふよは湊きサバヨウよりハ校きふと
 おえへけりよりも皮船多様入中

一 けりまてのるよ小橋より多し海上ハ
 革船の往來を多し

海人の婦人鼻柱に穴を穿ち小本を
 横より連環を垂れ下けたる金
 並に耳輪を穿ち同様に
 する金



衣履の縫目毎側
 オクチヨの縫目を縫
 する金

オクチヨは金

ツム
縫之金



セイウチの者より作る
 後平持するお写

かへてく



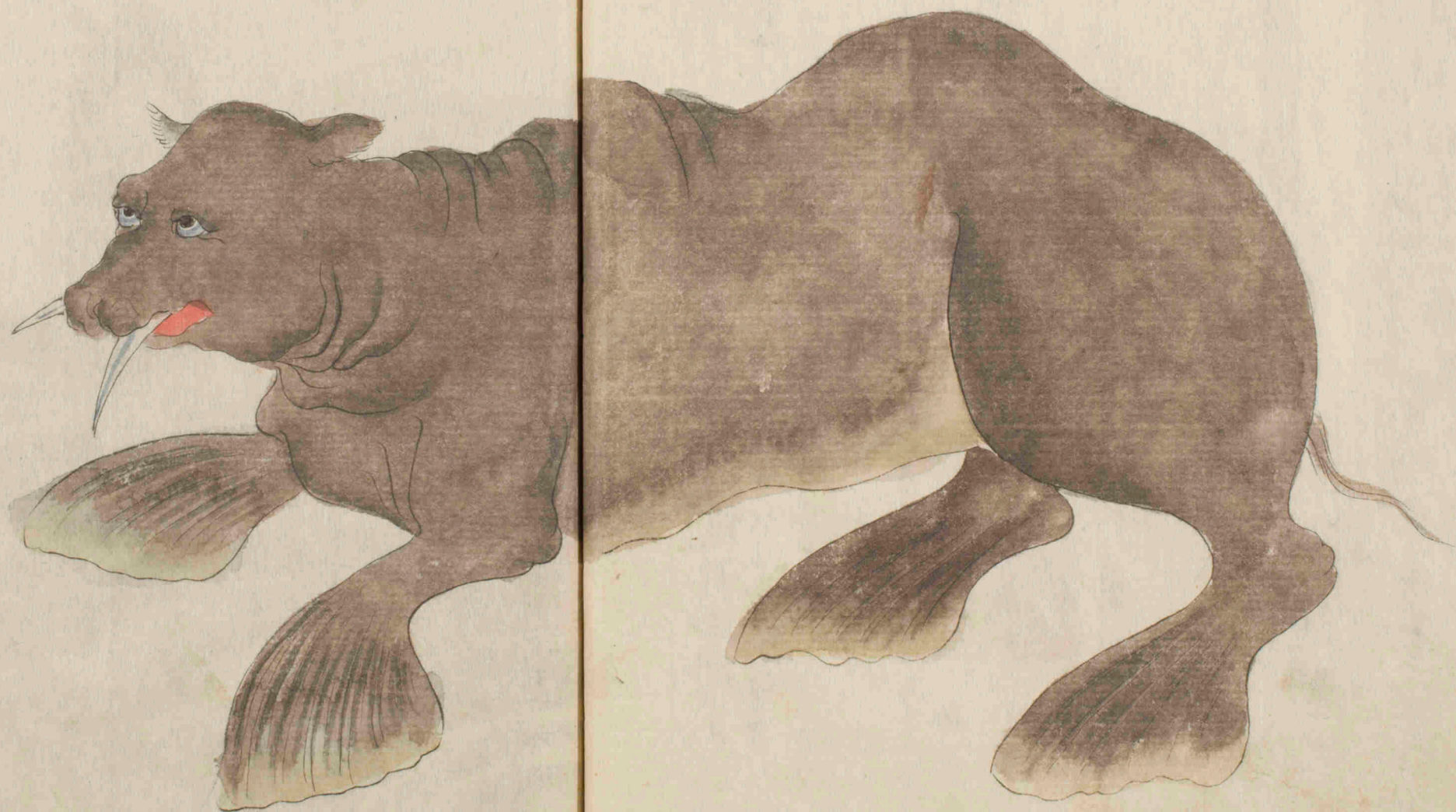
此の動物は、熊の一種である。其の体は丸く、毛は黒く、背中には赤い斑がある。足は太く、尾は短い。これは、日本の山に生息する動物である。

此の動物は、熊の一種である。其の体は丸く、毛は黒く、背中には赤い斑がある。足は太く、尾は短い。これは、日本の山に生息する動物である。

此の動物は、熊の一種である。其の体は丸く、毛は黒く、背中には赤い斑がある。足は太く、尾は短い。これは、日本の山に生息する動物である。



セイウチ図

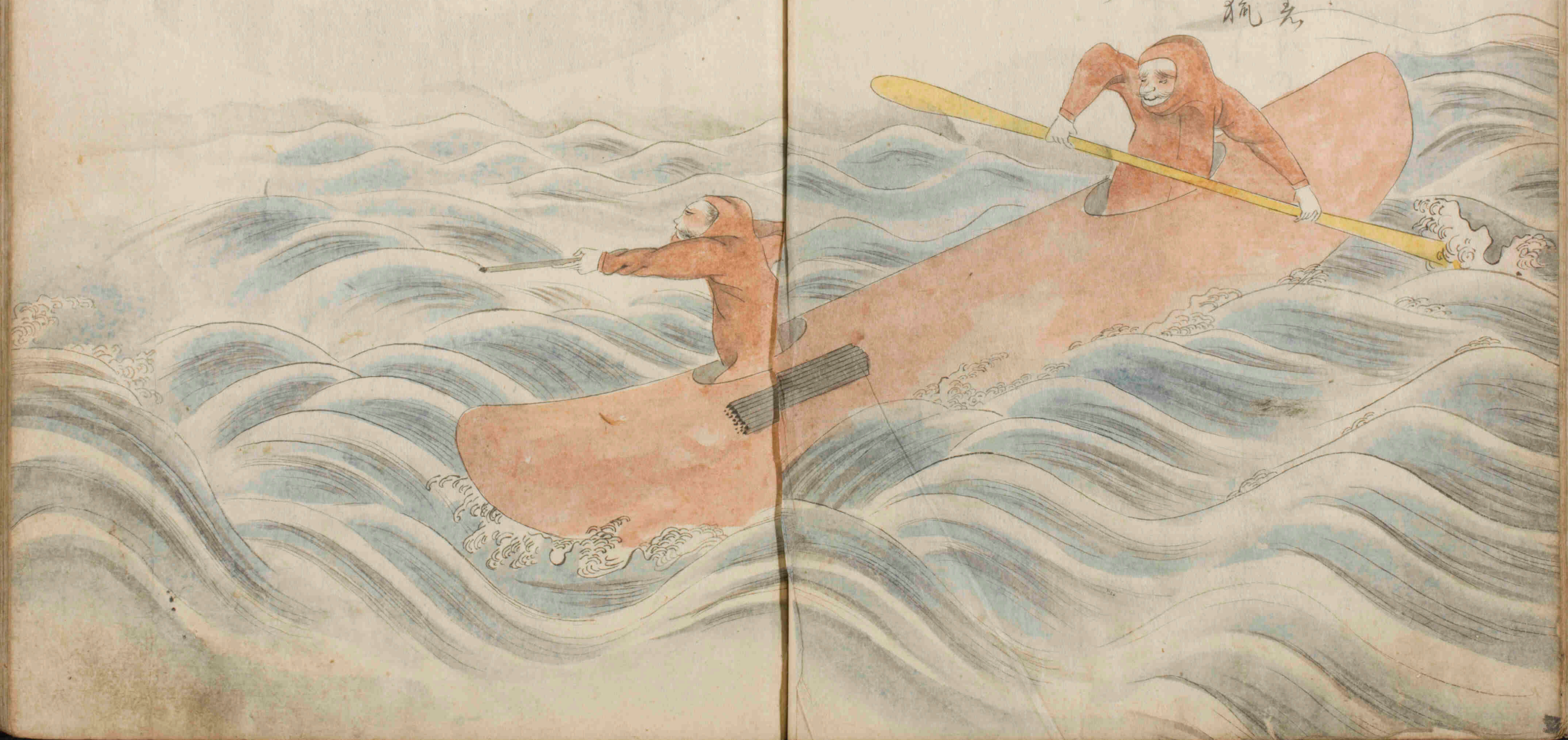


セイウチの体は
皮の硬い故なり

セイウチの

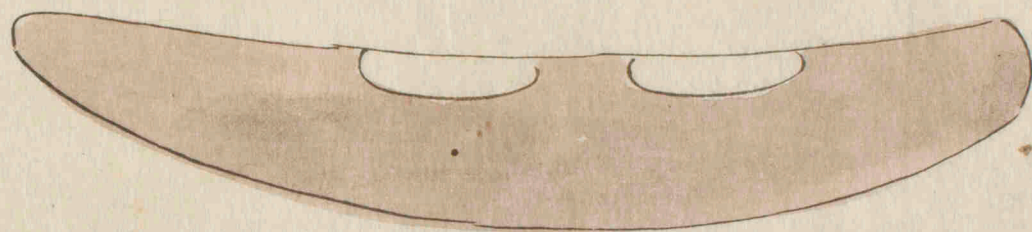
皮の硬い故なり
セイウチの皮は
硬い故なり

鴻人頭と被る皮衣と
皮衣より
とるす
船のま例に教本の
と強ひたあり

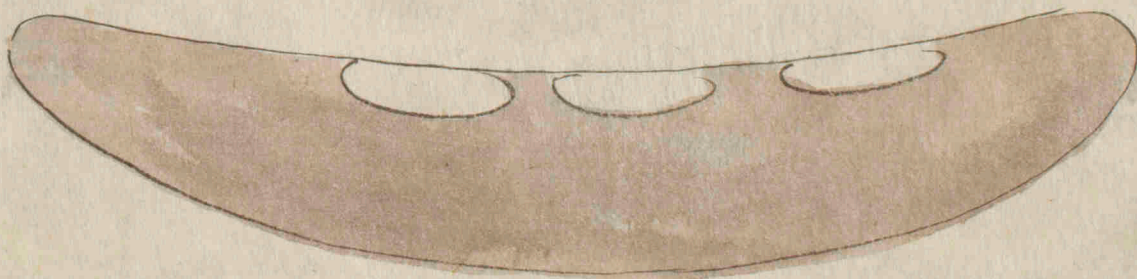


皮船全圖

二人乗

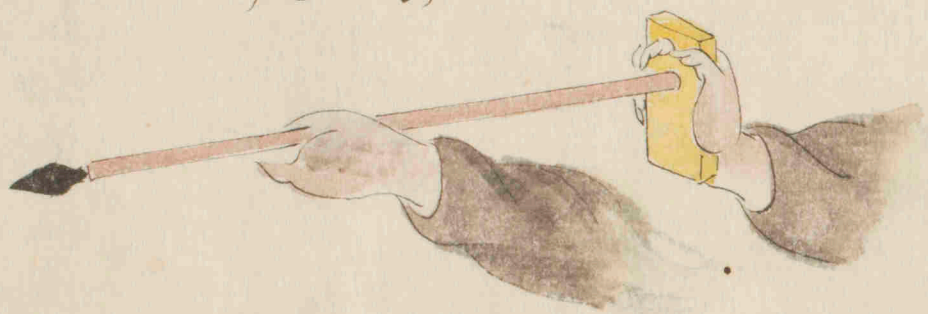


三人乗



櫓全圖

櫓を傳ふ手法の圖



既冠る
皮衣全圖



櫓の巾を
受る小板を
一孔を穿ッ
け孔はちの
ヒトサミ
手指をさし
て小板を五
指で固く握
りたる櫓の
おもとを
握る

蘇州府
松江府
上海府
嘉定府
常州府
杭州府
寧波府
紹興府
嘉興府
湖州府
蘇州府
松江府
上海府
嘉定府
常州府
杭州府
寧波府
紹興府
嘉興府
湖州府



蘇州府

松江府

上海府



三人

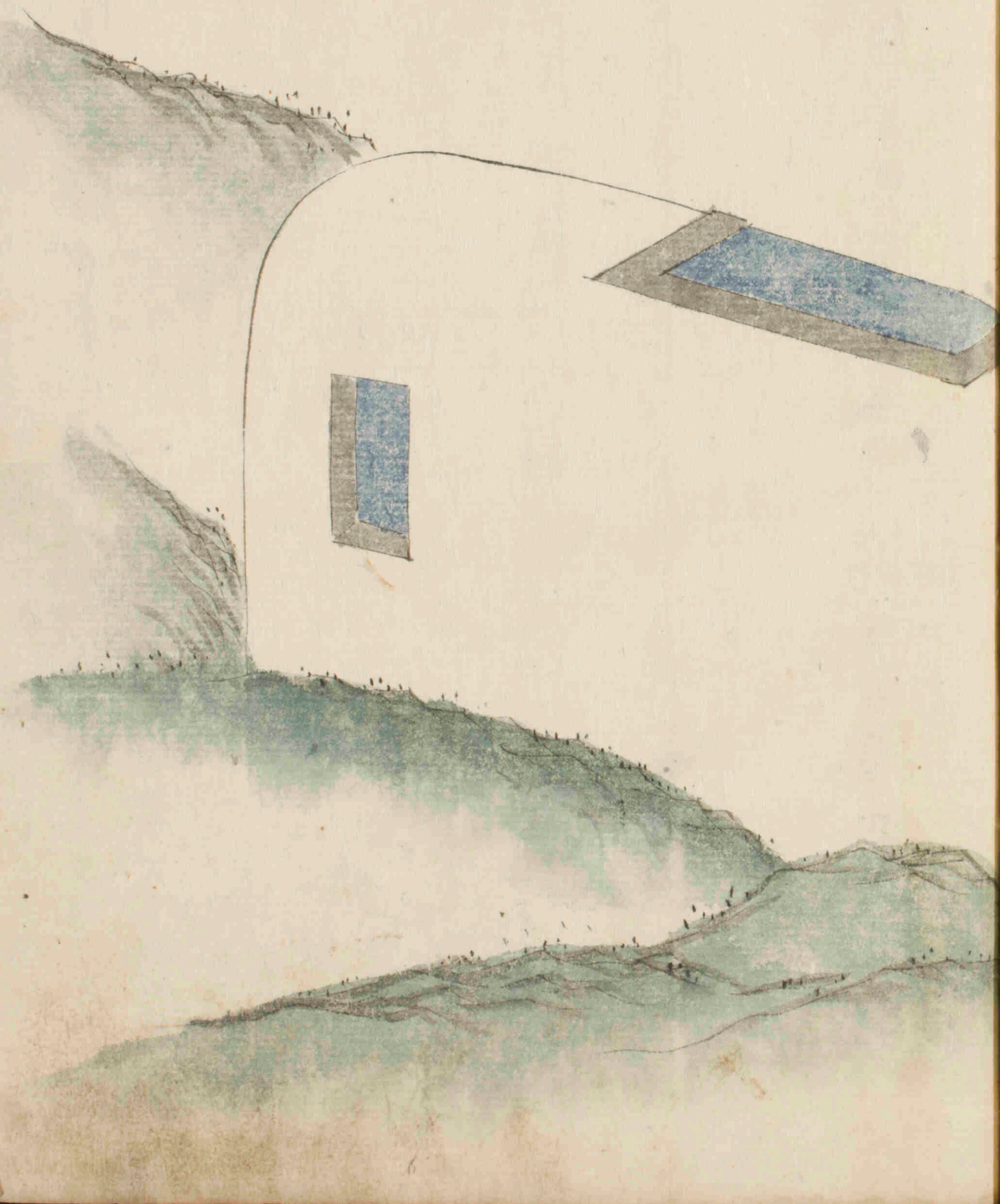
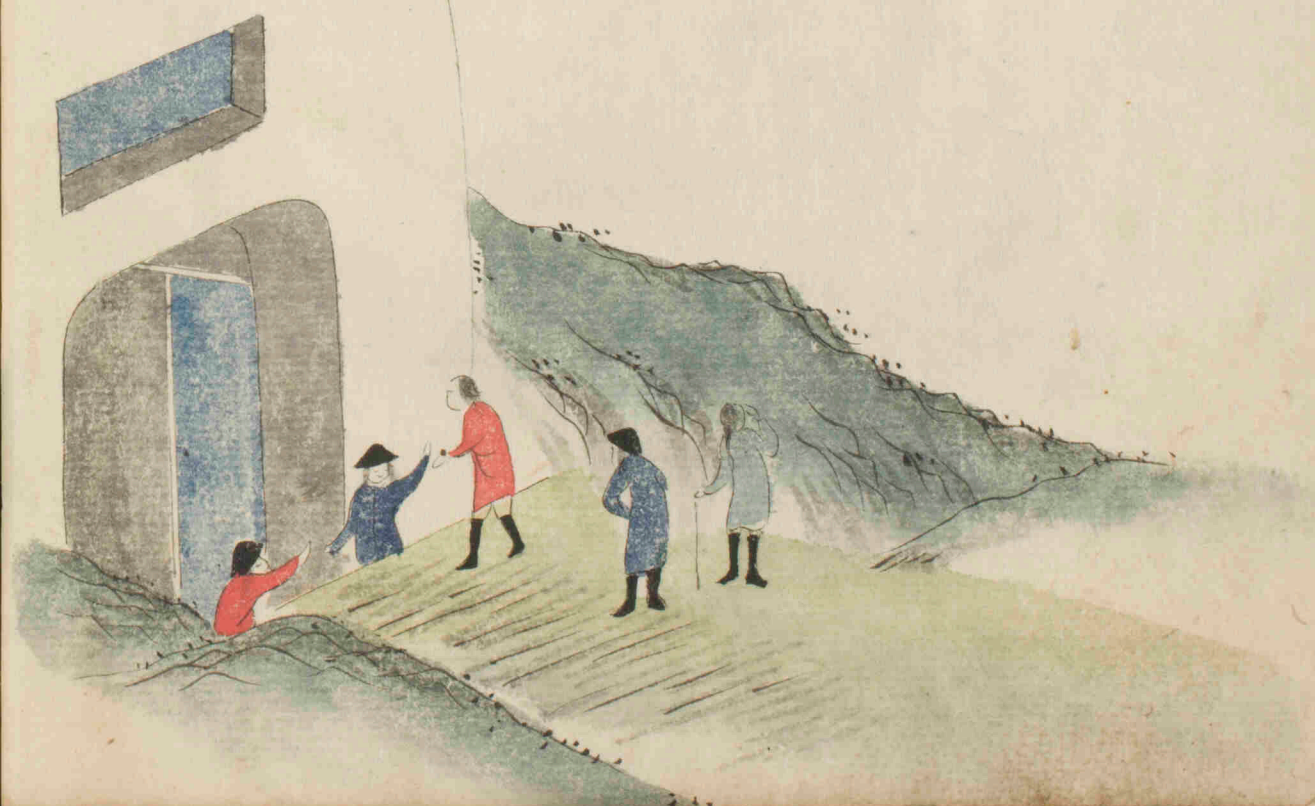
此 一 二 三 四 五 六 七 八 九 十 十一 十二 十三 十四 十五 十六 十七 十八 十九 二十 二十一 二十二 二十三 二十四 二十五 二十六 二十七 二十八 二十九 三十 三十一 三十二 三十三 三十四 三十五 三十六 三十七 三十八 三十九 四十 四十一 四十二 四十三 四十四 四十五 四十六 四十七 四十八 四十九 五十 五十一 五十二 五十三 五十四 五十五 五十六 五十七 五十八 五十九 六十 六十一 六十二 六十三 六十四 六十五 六十六 六十七 六十八 六十九 七十 七十一 七十二 七十三 七十四 七十五 七十六 七十七 七十八 七十九 八十 八十一 八十二 八十三 八十四 八十五 八十六 八十七 八十八 八十九 九十 九十一 九十二 九十三 九十四 九十五 九十六 九十七 九十八 九十九 一百

十アロウ曹西亞人我愛國



ナアウカ魯西亞人居要圖

造り形は圓——石室ありても
 合ハ横手は有て板戸を立ツ
 樽風其のへき面ハ硝子障子を
 仕るめ——天井の正中ハ「セイ
 ウチ」の草をとり垂るる是を
 燈にありとせしむ且面を避く
 一室に十人程居る内を
 長屋造りの如く——利用を
 その面とする之面の硝子ハ
 又——は切るなり



ナアワカ 西並人居を又國

造り形 石をあらはせ
合ハ様 板戸を又ワ
博風 其のまゝハ硝子
はれめ 天井の面中
みじの葺き 是より是より
たにあり 且ぬきと
こゝろに 十人
長を造り 舟用を
そゝり 舟の
又く 仕切



此の山は、山頂が最も高く、その山頂の周囲は、

て九百里と云ふ候け、その山頂の周囲は、

（山頂の周囲は、九百里と云ふ候け）

ヨウハダリ、その山頂の周囲は、

（山頂の周囲は、九百里と云ふ候け）

その山頂の周囲は、九百里と云ふ候け、

（山頂の周囲は、九百里と云ふ候け）

その山頂の周囲は、九百里と云ふ候け、

（山頂の周囲は、九百里と云ふ候け）

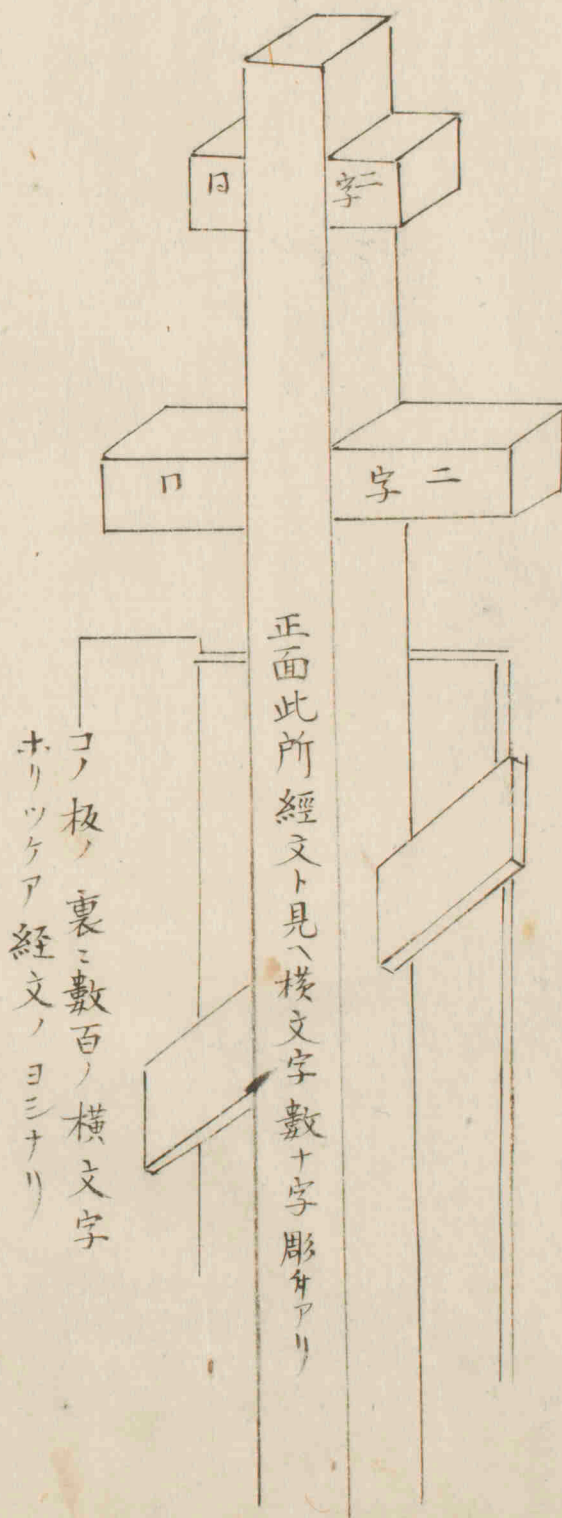
その山頂の周囲は、九百里と云ふ候け、

その山頂の周囲は、九百里と云ふ候け、

その山頂の周囲は、九百里と云ふ候け、

その山頂の周囲は、九百里と云ふ候け、

七ヶ角柱として作りゆゑの塔の中に建テはる横文字はり
 出で何と云ふお徳何のめしたてゝあつたりや字は
 かりゆゑのまや退て地をへ入れ寺へありはけりてはる



此の塔は西人教徒が作りし地のうち建てる塔はあり

一 ナアウカよりけりて塔は西渡りヨロエヤ里教より
 て九百里と云ふ候けりハナアウカよりサニハニ
 ヨウへ出りけりて三角形はる事ゆへ
 是とも里教何程はるや取らもはる
 一 アニセイウカよりカニエヤウカと云ふ地の淺
 へハ海と云ふ百里と云ふなり

けり二日程退りてありお徳お帆して

六月廿八日オホーワカトヤス大湊へ参る

一 けろロニヤルおまより地境より南乃端の

ろーお地の地境へ入口の湊れり

一 アミセイワカよりけ湊への里程なりヤミル

但し十日程ゆゑ一里は

一 ナアツカよりオホーワカへ参り海と彼里程

三子五百里と云うヤミルサニハヨウアミセイワ

カあるへ参りけ湊へ参るの事也凡そ

千里もあるへきと奉なり

按るは南小極お地六十度前後の地より

海あり七十五度前後南小極下をなれハ

たは氷りて解す輿地圖は是を氷海の

部と云極地の地はなれハ氷のとな

る氷り又氷り又氷り氷を氷りて

山をなれ氷山なり即見狼徳亜エイ

スセント 東國等の地ハ氷海なりと云極下

いさく 氷山現る暖水の候を濡れハ船 和

葉等の人を海に懸隔し船を引り其れ

勢を弱状せるものあり け度漂客を

相預するの状是と思ひやもたなり

又南アメリカ海峽と云ふと云せる所の岬の跡と云り
一時に居やうと極下七十度の海を舟乗込ん
ごうと船民大に驚愕せし
こと本條にあるなり

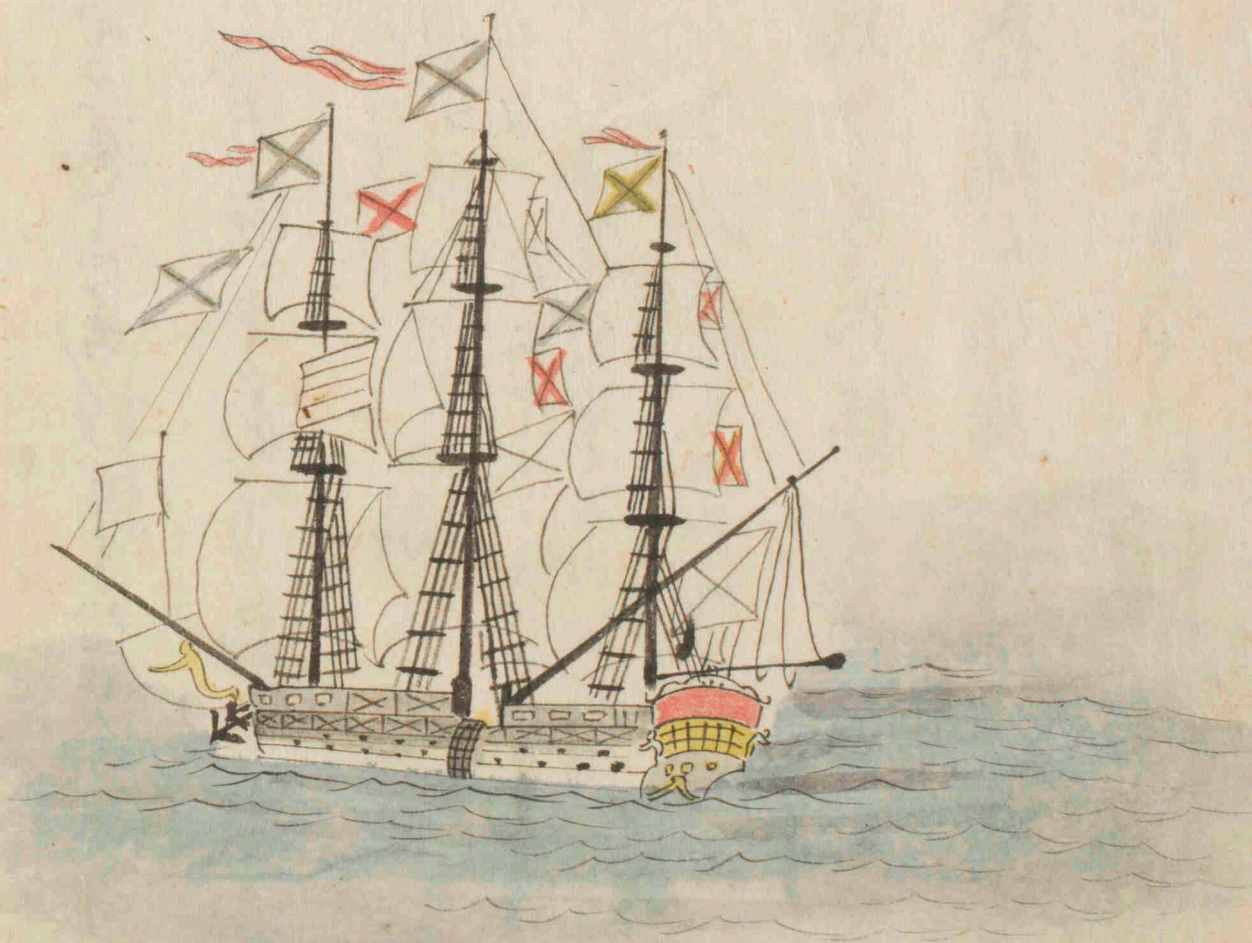
倭く今新に和

葉字をよめる図により 志像してそ業を

製しるる附せり 我漂客ホふ思像し

してかゝる所をありし古今の奇変

驚き変すへきことなり



屋^{オホーツカ}和都蛤

寛政七年乙卯六月廿八日オホーツカとチ湊へ
 恙者す本船の船取より捕者ともこのことを早速役所
 へお届け引渡すの同所より捕者の様子を町
 役人仲仕宅とおえへ表書きに六百觔重なり八九
 百觔有る一月ハ板敷より腰を殺して居る處ありへ
 同船十五人とも二匹は捕獲せられ食事麦の粉を
 餅のこし梅干しを食ふと云ふ給させられ
 麦餅のこしを
 餅のこし

- 一 けりハヲロシヤ領地への入口の湊より是より
 本国郡府より地縁は此所より南向き大河の
 海へ流る川湊なりけ地より山のふもと大河
 流るよりを本お捕り新港のより取られ
- 一 役所此所よりけりより本行よりお捕居り
- 一 ナアツカよりけり湊近大凡彼里数より三千八百
 七十里程船を寄れアミセイツカよりハ未申^{西南}
 又申周と云りナルカミヤーツカと云す湊の

坤をハたゝえ〜 け所へ 恙者仕ゆ

一 恙者の節ハ五百石積位の船五六艘かり
居ヤル

一 け湊ハ小湊中一の所ハ仕ゆ所又ハアメリ
カの所へもけ所より船をちゆ

一 日本船夷船等の肉コレイツケとヤす所へ近
年麦の種と牛承の敷をけ湊より渡ヤル
〜 通リヤル けコレイツケハカミエヤー〜 ワカと

ヤす湊より 渡さゆ所の事十八般ある
〜 け所の横虎あり〜 とある 此處の

横虎皮よりハ價も一倍仕ゆヤ〜 船ヤル
按ハト東亞船夷ウルフ 所の内なる〜
ウルツフ 船ヤル〜 横虎皮〜 といふ

又按ハ 洋幣光夫丈等を以て年 獲送〜
あり〜 船とけ湊より仕ゆ〜 子モロ入着

〜 船〜 船ヤル〜 とあり 光夫
太史ハ 漂民の所を〜 カミエヤー〜 ワカと

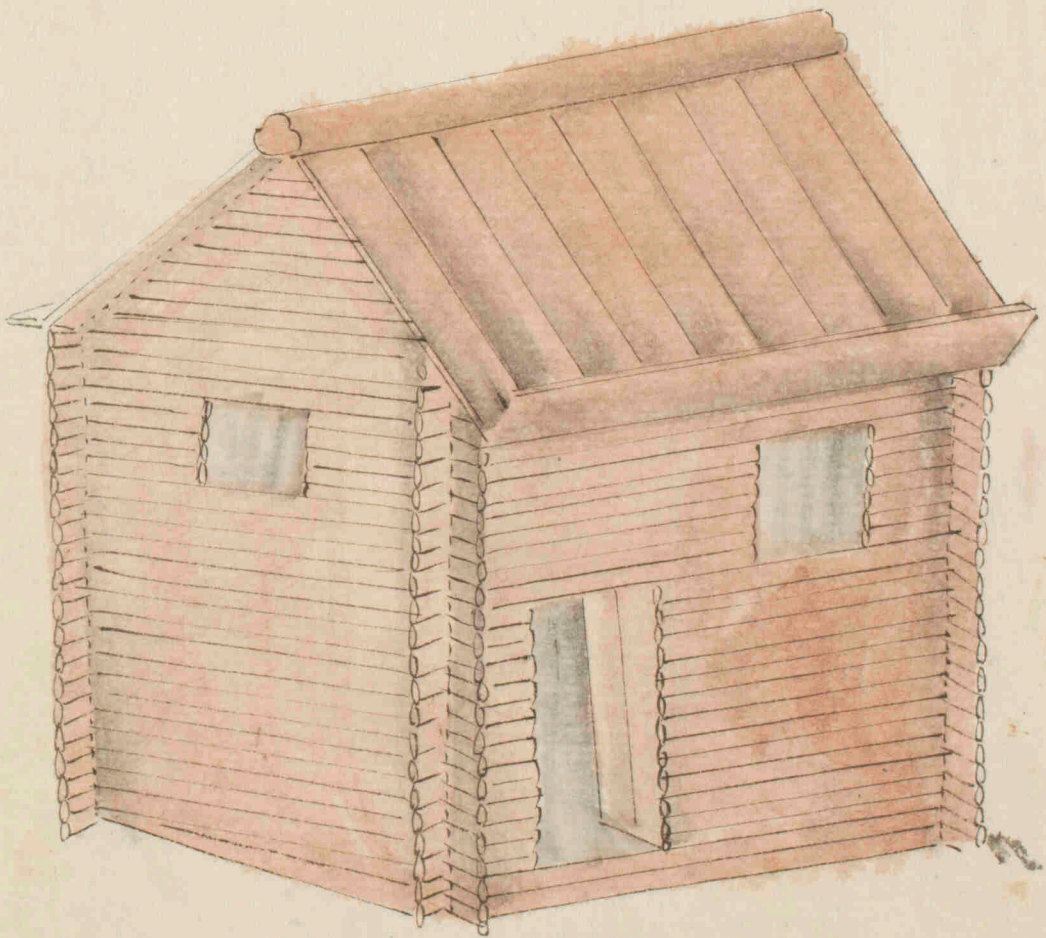
いし湊へ送るも地味へ入りぬ

- 一 石火矢殺挺居玉川の湊の丸木より一
方よ七八挺一方ハ沙場の上よ三挺又与
乃前よ二十挺解居玉河れも車よりけ
の臺よ裁り解け長さ七尺より口の深
り二尺八寸はれ
一 寺等一ヶ所はれ
一 庭造りハ横よ丸太木を重手組に所等たり

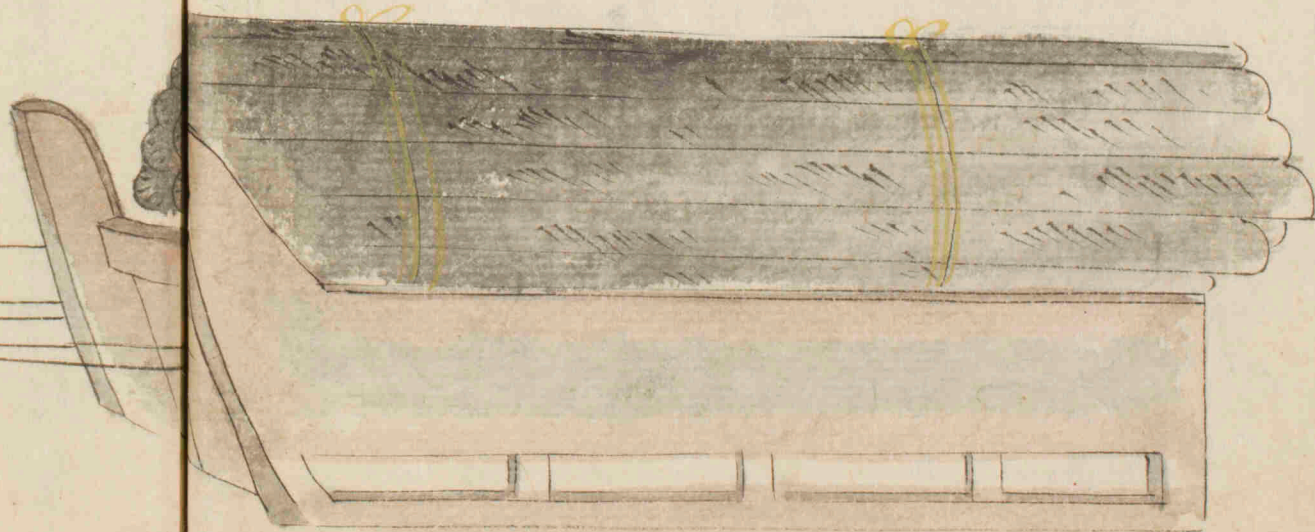
家れり庭根より板を用ゆ

オホーワカ

家屋図



一 けふ是迄 石中の意よりハ暖うある方ハ此
けふハ日中の二月比の氣候と云ハ此
の内ハ線入給ハ單物忌ハ八月ハ入ルハ
ヤル十月の比ハ海の水も厚く氷り川も
勿論一面ハこけりヤル右の比ハカニヤ
とヤル海へ子里解の海とも厚氷よりつめ
ゆゆへ馬車ハ枯魚を積ミ大ニ牽セ難キ
一 けふ馬は解るく大ニ牽セ難キハ



一 け地ハ雪多く積りゆち地ゆへ多し雪車を
用ひ薪氷の薪何れでも積る多しなり此
ハ凍土にもに較正の犬は牽せしめを犬の使
ひ方能有りたるものなり使人錫杖のご
ときものを引く是を振り口笛を吹くホロツ
右と云と云ハ右の方へ引きライウ たと云 と云
ことハたへ引きビラマ 志中と と云ハ左へ引き
り り 只引けといふをシトバイといふ錫杖を

地は多し〜 あ〜せハ足を止むを薪の煙を
きよ流し犬は多しありて牽するなり是物
児の時より戸外へおびけ畜ひてて家の内は
のこゆき〜 あ〜すあり夏は生魚を
半魚を食ハ〜む 是ハけ地は水を越せし者なり
不変す是た平お強れる示
ありカヒミヤーツカ
もけぬるなりと云

按は止白里の小島境海地の地も此犬を
飼ふの景況和榮録する輿地の由は景況あり

一 土地よりあるきゆへヤコーツカとやすふより
せ候ひやゆ是ヤコーツカの方へ人の往來物送
送のためあり彼地よりくる人等のせま
りくる又ハ物を送送し來りくる物等
を送るよりけりあり用を便しやゆ
一 ヤコーツカ其後の人々の惣名をヤコーテとやゆ
昂ちけりあるもヤコーテも難り居やゆ
一 滞留中食料ハ右よりやゆ麦飯
ケレブと云 譯より
ルコーツカの方より

一 けりあるも日本一俵をよゆ日本より渡り
ゆり俵もそより日本俵よりくるやゆ

八月十八日 拙者立居ゆ所へ役人來り け地を立ゆ
仕立役やゆ惣人数一同よりあるやゆ惣人数
百より 役手若六辰藏三人お中りゆる十八日
發是仕立代官交代し序とおええ代官並様き
役人附役人数二十人斗り出居ゆ三人者も馬
寄せ先列ヤコーツカとやゆ光りゆ越え居る

一 外拾二人とのハ跡ヲ残リナル熱人殺ハ追テ送リ
為ル容子ニ此後ハ代官先ニ立寄リ

[illegible]

一、三、八、中、夏、有、れ、の、書、集、を、詠、く、給、へ、り、ゆ、を、は、
已、り、手、に、書、を、傳、り、枯、葉、れ、と、を、名、つ、け、て、給、へ、り、
卯、の、飼、科、と、て、ハ、持、集、り、仕、ゆ

一 彼等のハ武家ノ時
畢キニタテヲ去リヤリ

後ひるゝふか極ふ後一はを格別丈更ふ幸甚
も能く後一華那ふ後ハ申但父ふ後ハハ
そんきりハ無く我を別乃不々申ハ至ヤハ

一 乃中若物并食物等より造り成るべし

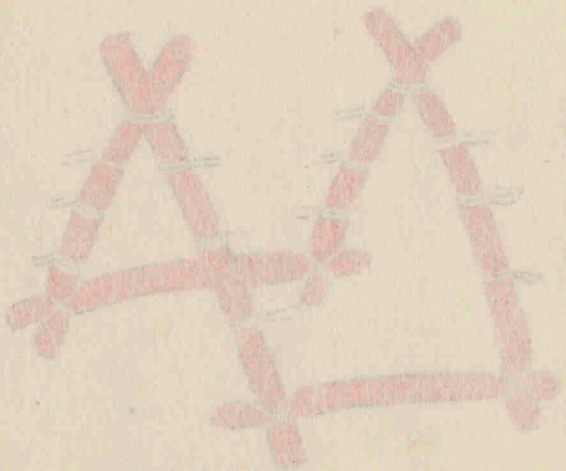
より七百里 先へアウタニヤルまで人
衣宿継も無く山道中より中夜宿は
け所ある中程る方のヤコーラニ人
ウレ

一通中装束は皮の着るより毛の着るより
前後縫ひつた隙をあけ穴をあけ裾のより
あて上の穴より隙をあけ袖の布は改巾
を縫ひつけ
目計りおす様
ある改巾へ 右穴より隙をあけ

襟の方より縫ふ右改巾を引くよりあて
た右の筒袖へ縫ひつけ袖の袋を縫ふ
色は鹿の皮の當とす此の代皮を何色
もはねより縫ふ当次より中

一の脊より縫ひ人をはき鞍のとき物を「ヤツ
ロー」とヤル又節を縫ひねははき「たて
ゼリワナ」といふ下のあのと

猿次郎のうた



おとどろ
き



結ひめを
おとどろ
きの
おとどろ
き

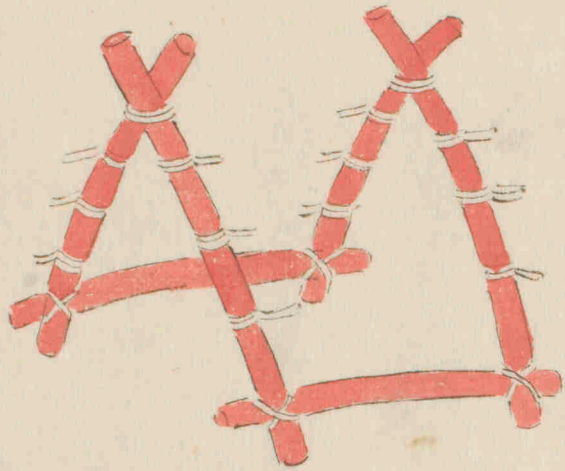


馬

旅の用急せし人の馬



荷を固り
あつる馬



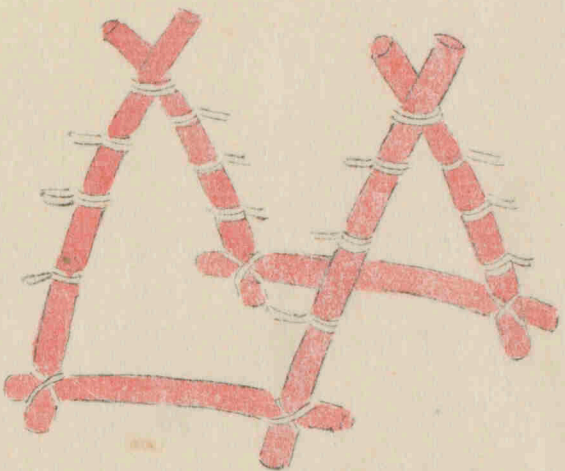
結ひめをまゐり
是を荷鞍
の紐に施せし
そのよりを
おろす
なり紐へ
細くする
子草之



馬は荷を扶けし馬

旅の用意せし人の馬

馬の荷物



馬の荷物



馬の荷物
馬の荷物
馬の荷物
馬の荷物
馬の荷物
馬の荷物
馬の荷物
馬の荷物
馬の荷物
馬の荷物



[illegible]

一 け道中一休をふまゝくわゝ山坂うちゝは麓ゆへ
 續き、吾々踊りあふりりるの下後と吾々
 ゆり多く、此座ゆ定りゆ道筋とてはなぐおそへ
 去先ふヤコーテるゝ舞りおまじ業因は舞
 る人の舞りゆる手明る何れも口附りゝる
 乃舞り次舞りゝは皆先るの疏をあらひ舞り
 は又わゝ卑徳のわゝゝ多ゝゝ此れゆゆとて馬
 足ふれゝゆてゝ此れ舞ありゝゝゝ此れ舞

一、多敷さしへて元龜子や山熊を不度く元龜の
おくるをたけ度油ひきあすとかいふ
一、山中少路西葉乃松多くは産ゆ柴をくふも
産ゆは直皆小柴をとりては産ゆ柴をくふも
のさ記ゆさぬ機本多くは産ゆ柴をくふも
産ゆは直皆小柴をとりては産ゆ柴をくふも

九月廿五日 アウタニと申所へ至る程まで 七百里
 後山申云十七八日カヅリゆと見え申ル ヤコーウ辺よりハ
 三百里と云ふ

といふれは彼 大川の側より一歩殺三軒ありけり
玉の里殺あり ヤコーウカとの食との心掛なり

一オホーウカおろし馬殺すたよりて馬
右に雪中夜さうく追て斃りて漸十八日後
残り残り馬子中 三日草里けり
中よりこのアウタこまうく馬
三丈よりヤコーテ三人をき 追る二十丈り
馬あせ人も十人けり食物未為おむくひり

いふより系馬ハけ地の川向をより
あせの馬は

一丈九寸五日ヤコーウカをさへけりて用
そと馬の馬殺すれり 馬は馬をさへ
入れ馬をいふ 系りやうて馬をさへ
殺すやう馬をさへ 馬をさへ
一馬を殺す 馬を殺す 馬を殺す
機一杯り馬を殺す 馬を殺す 馬を殺す

をけりしよりとてふきし所はすき成瑞きなり

湯より用ひし物もゆへ瑞きも用ひし持

系枝しゆ事より所はけきと六月のいふ事

七月より八月までや解りし

一 け所より人のははれし物もけりし者

一 友人は所はけりし物もけりし者

上 瘡
仕

一 けりし物もけりし者

一 麦もあまなり 牛 野牛 コシヨウ 豚の乳なり

考へてけりし物もけりし者

乳汁のきりし物もけりし者
コーツカのきりし物もけりし者

食物もけりし物もけりし者

ヤコーツカを指しきりし物もけりし者

けりし物もけりし者

よりり 家畜もけりし物もけりし者

りし物もけりし者

アウタニより以西
人家土室乃圖
窓ハ張りの板
と仕入れさる



一
内ハ殊の布あつて一帯のあー外より見るに
きりやまゝぐみもかりやゆきハこれを拂ひ
ふきゆきも始よりもまゝくあつてゆきの
けさの女もある婦人いふを三つ張りと
後へりけろろろこのよおけて窓へ結
ひ玉の娘はハエウとてやれとけりあて
女子の冠りとのハ種々天我を絨そゆの毛織物
乃敷さゝりけり巾の形もさゝりさゝり

榮耀紋——忌中の縁うも桐虎——ボリ

その皮を用ゆ毛の牙を卯といふ——やゆ

櫛の歯を歯うとて牛角すくセイウチ 上ノ巻
よるゆ

の牙うとも作りやゆ平日はさ——あや桐子

うき——けきの女入妻はふ仕ゆ 本三又

